# 角笛——ドイツの音、ドイツの心

渡辺美奈子
（文学博士・ドイツ文学・横浜薬科大学講師）Minako Watanabe

■『少年の魔法の角笛』第1巻（1806）の表紙

『少年の魔法の角笛』はどんなに誉めても、誉めつくせない。この本には、ドイツ精神の最も優雅な花が咲いている。ドイツ民族を愛すべき面から知ろうとする者は、この民謡集を読むがよい …… ドイツ人が外国で長いこと、この表紙の絵を見ていると、あの耳慣れた角笛の音が聞こえるように思い、望郷に駆られるかもしれない。（ハイネ『ドイツ・ロマン派』1836より）

L. アヒム（ルートヴィヒ・ヨアヒム）・フォン・アルニムとクレメンス・ブレンターノによって編纂された『少年の魔法の角笛』（以下『角笛』）は、「古いドイツの歌」という副題が付いた民謡歌詩集であり、収集に加わった多数の協力者の中にはグリム兄弟も含まれる。民謡や民話の収集は古くからあったが、18世紀からその気運が高まり、ヘルダーの『民謡集』を経て、この『角笛』と『グリム童話』で最盛期が築かれたといって良いだろう。『角笛』

が同時代および後世に与えた影響は計り知れない。民謡歌収集への思いに、ふたりの編者がたどり着くまでの過程をふり返ってみよう。

ブレンターノは1778年、裕福な商人の子としてエーレンブライントシュタイン（現在コブレンツの一部）に生まれた。ライン川とモーゼス川の合流地点ドイチェスエックのライン川右岸で、ここに母方の祖母で人気作家ゾフィー・フォン・ラ・ロッシュが住んでいた。母は、若きゲーテと親しかったマクシミリアーネ・フォン・ラ・ロッシュであり、ブレンターノが15才の時に亡くなる。一方アルニムは1781年、プロイセン王国侍従の子として誕生し、生後3週間で母の死という悲運に見舞われ、兄とともにベルリンの祖母の元で育つ。かつてブレンターノが在籍したハレで法学、自然科学、数学を専攻した彼は、1800年、さらに自然科学研究を続行するため、ゲッティンゲンに赴いた。翌1801年、ブレンターノが哲学を学ぶために当地にやってきて、ようやくふたりは巡り会う。ライン左岸がフランスに併合された年のことである。

1801年から1804年まで、アルニムは兄と共に、教養を積むため、ヨーロッパ一周旅行に出、1802年にはブレンターノもライン地方の旅に加わる。古城、ぶどう畑、ワインの香り、聞こえてくるラインの流れと民衆の歌声。そのことばは、むろんドイツ語である。ゲーテやシラー等著名な詩人らによって優れた作品が数々生み出された時代にもかかわらず、フランス語を上品な趣味や教養と考える貴族等により、ドイツ語は軽んじられた言語でもあった。マーラーの歌曲集『亡き子を偲ぶ歌』で知られるフリードリヒ・リュッケルトは、彼のソネットの中で、フランス占領下にある今こそ、民族共通の言語である母国語を愛さねばならないと説いている。

リュッケルトによるこのソネットが匿名で出版される10年前の1804年、『角笛』の本格的な準備が始められた。ブレンターノは、8歳年上の著作家ゾフィー・メロー夫人の離婚成立後、1803年に彼女と結婚し、ハイデルベルクに移住していた。『角笛』第1巻は1805年9月に当地ハイデルベルクで出版される。ブレンターノの子の名は「アヒム」Achimと「ヨアヒメ」Joachimeで、いずれもアルニム自身の名と共通していた。ふたりとも生後数週間で亡くなり、出版の翌1806年、今度はブレンターノの妻が第三子の産褥で死別する。わずか数ヶ月後、彼は16歳のアウグステ・ブスマンと再婚するが、結婚生活は決して幸せとは言えず、ふたりは1814年、正式に離婚する。すでに1808年に『角笛』第2巻および民謡集を伴う第3巻が出版に至り、翌1809年、ブレンターノはベルリンに移住していた。ここで少し、ふたりのその後を垣間見てみよう。

ベルリンでブレンターノの心を惹いたのは、20歳も年下のルイーゼ・ヘンゼルだった。ルイーゼは、メンデルスゾーンの義兄となる画家ヴィルヘルム・ヘンゼルの妹で、兄の親友ヴィルヘルム・ミュラーと、たいへん親しく文学的な交際をしていた。若きミュラーは、後に『ギリシア人の歌』と総称される辛辣な風刺的詩集で有名になり、1827年に亡くなった後には、シューベルト作曲による連作歌曲集の詩人として、さらに広く知られることになる。だが、当時既に高名な詩人であったブレンターノの出現により、彼は

1816年末に身を引く。一方ブレンターノはルイーゼに夢中になり、信仰深い彼女と結婚するため、プロテスタントへの改宗さえ考えた。ふたりの仲は街の噂となるが、ブレンターノは気にするどころか、匿名でミュラーを愚弄するような表現をした。アルニムと共に執筆し1817年に刊行された風刺的文において、彼はミュラーのイニシャル W と同じ発音で「傷ついた」の意味である weh を掛け合わせた「ヴェーミュラー」Wehmüller（傷ついたミュラーの意）なる名の人物を登場させたのだった。そのことばどおり傷ついていたミュラーは、失恋をして自ら命を絶つ「粉挽き職人」すなわちドイツ語で「ミュラー」Müller（ミュラーの姓と同じ語）を主人公とする連作詩『美しき水車小屋の娘』をすでに詩作していた。ルイーゼの母の反対等により、ブレンターノは結局2度目の再婚に至らなかったが、ルイーゼが彼の影響を受けてカトリックに改宗し、ふたりは生涯交流を保つことになる。一方アルニムは、1802年にフランクフルトで知り合っていたブレンターノの妹ベッティーネ（またはベッティーナ。本名はエリーザベト）と1811年に結婚し、ブレンターノの義弟となっていた。

なおアルニムは福音派で、ブレンターノとは、『角笛』に収録しようとする詩歌の選択などに、さまざまな意見の食い違いがあった。だがあらゆる問題を越えて認め合った結果、『角笛』は大成に至る。ゲーテによる第1巻の評はたいへん好意的で、編者への賛辞の他、各詩に寸評まで書かれている。この本が置かれる最適な場所は、音楽愛好家や巨匠のピアノの上だとゲーテは言う。詩に、周知の適切な旋律が付けられるか、または「神が望まれるなら」詩から意味深い旋律が誘発され、すなわち作曲されて歌となるためである。ゲーテのことばは現実となり、シューマン、ブラームス、マーラーらによる声楽曲としても完成された。マーラーには、「原光」のように、歌曲集だけではなく交響曲にまで取り入れられた歌もいくつかある。こうして口伝による民衆文化が、偉大な詩人によって詩集として完成され、大作曲家の手により、大衆性と高雅な芸術性を兼ね備えた価値ある音楽作品ともなったのである。

■『少年の魔法の角笛』第3巻（1808）の表紙